

一人称代名詞としての「自分」

著者名(日)	木川 行央
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	17
ページ	39-65
発行年	2011-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000963/

一人称代名詞としての「自分」

木川 行央

要旨

現代では軍隊用語あるいは階級社会的な人間集団に属する下位の者が上位の者に向かって言う場合の一人称代名詞と捉えられる「自分」は、明治期の文献では上位の者から下位の者に対して用いる場合も多く、現代のような下位から上位へという方向性は見られない。この方向性が確立していくのは日露戦争後、明治末から大正期にかけてであろう。この背景にあるのは日本陸軍の改革である可能性がある。また「自分」が上位の者が下位の者に対していう場合でも、逆の場合でも用いることができ、かつ軍隊用語や現代の用法のように下位の者から上位の者へという方向性が生まれたのは、この語の中立性によるものではないかと考えられる。

キーワード：自分 一人称代名詞 軍隊 陸軍

0. はじめに

「自分」という語は、東京語ではいわゆる再帰的な用法で用いられるのが主であるが、「自分が行きます」のように一人称の代名詞として用いられることがある。この一人称代名詞としての「自分」は、軍隊用語として用いられていたことで有名であり、現代では衣畑・楊(2007)のように、「役割語」の一つともいえる。

第二次世界大戦以前から、子供や従軍経験のない人々にとっても、軍隊で一人称代名詞として「自分」が用いられることは、周知のことであったと思われる。たとえば、柳家金語楼¹⁾の落語「兵隊」(あるいは「落語家の兵隊」)には、初年兵が教官に答える場面で、(1)のように一人称代名詞「私」を「自分」に言い換える場面がある。

- (1) (教官)「此三年式機関銃は如何なる力が有るか、如何なる機械によつて動くか答の出来るものが有つたら手を上げろ」と誰れ一人手を上げる者が無い。私の気性として答へない訳にはゆかない。大声に「私デハ無い自分が申上升²⁾」(柳家金語楼1928:334³⁾)

また、1931年から雑誌『少年倶楽部』に連載された田河水泡⁴⁾の「のらくろ」では、単行本の最初、読者に向かつてのことばでは「私」が用いられているが、入営直後、古兵に対して「自分」を用いる⁵⁾。

- (2) これから^{わたくし}私の軍隊生活ぶりをお目にかけます (田河水泡1932:2)
(3) 古兵殿 自分はこんど入営したのらくろ二等兵であります (田河水泡1932:5)

また、部下が出来ると、(4)のように「わが輩」が用いられる。「のらくろ」は二等卒から始まり⁶⁾、大尉にまで昇進しその後除隊するが、昇進しても上官に対しては、「自分」を用いている。(5)は、除隊時に聯隊長に対して言うことばである。

- (4) ヤイ新兵あつまれ わが輩は照空隊の班長だぞ (田河水泡1933:112)
(5) じぶんは軍人をやめて大陸開拓のために力をつくしてみたいのであります (田河水泡1939:16)

これらを見ると、「自分」は、階級が下位の軍人が上位あるいはそれに準じる人に対して用いる一人称代名詞であったと考えられる。では、下位の軍人が上位の軍人に対して用いる一人称代名詞としての「自分」は日本に軍隊ができた時点から用いられていたのか、そうでないとすればいつ頃から用いられるようになったのか、またなぜ「自分」が用いられるのか、これらの点について確認するのが本稿の目的である。

1. 明治期以前の「自分」の用法

『日本国語大辞典第二版』によれば、「自分」は、室町期から再帰的な用法、一人称代名詞としての用法ともに見られる。江戸時代に入っても両用法はともに確認できる。(6)は再帰的用法、(7)は一人称代名詞としての用法である。また、(7)に現れる「御自分」は「貴方・貴殿」の意であり、「御」の有無で二人称代名詞と一人称代名詞に分けられることが分かる。

- (6) ^{じぶん}自分の^{しこう}伺候か但シお使者か。御舎弟出羽の冠者頼平のお^{わび}詫ならば無用(近松門左衛門1724:410)
- (7) 最前の髪切りすがたの人其まゝ男の風俗して出給ひ。なを言葉づかひもきびしく一腰をはなたず。身をかためて座して兼々御自分の義は人伝うけたまはりおよび。いつぞはとそんじ候に今日の御入来神八幡しうちやくしうちやく⁷⁾。自今は別しておこころやすくなどゝ物がたふあいさつせられ。御名を失念^{ごみよう}いたしましたとある時。^{じぶん}自分鳥川九大夫長長の牢人もの京都もめずらしからず。(井原西鶴 1693:257-258)

江戸期の文献に見られる一人称代名詞としての「自分」は、主として武士の言葉としてあらわれる(上の西鶴の例の他に、「初音草噺大鑑巻二・千早振神の油」(1698)、南仙笑楚満人(為永春水)「明鳥後伝寢覚之繰言巻八」(1829-1830)など)。さらに、小松寿雄(1985)にあるように大奥勤めを経験した女性に対する聞き書きによれば、将軍も用いていたようである(○は質問者の言葉、◎はそれに対する回答。話し手は、中藤箕浦はな子と御次佐々鎮子の二人で、箕浦は14代家茂の代、佐々は12代家慶から15代慶喜まで大奥に勤めているが、この回答がいずれの回答かは不明である。従ってどの将軍に関しての証言であるかも不明である)。

- (8) ○将軍様のお言葉は、どういう風でありましたか。(略)
- ◎御自分様のことを「こちら」と申されました。(略)将軍様は御自分様を「自分が自分が」と仰ったこともございました。(東京帝国大学史談会)

編1891-1892:154)

2. 1945年以前刊行の文法書・辞書に見られる「自分」

次に、明治期から第二次世界大戦までの間に出版された辞書・文法書に「自分」がどのように扱われているかを見ておく。

まず、1889年刊行の『言海』は、意味が「オノレ。自身」の名詞「自分」と、「自称の代名詞。我。吾。」と記述されている代名詞「自分」とが、別項目としてあげられている。また、山田美妙『日本大辞書』も、「名。及、代」とし「オノレ=ワタクシ。=自身」とあるところから、名詞の「自分」と一人称代名詞としての「自分」を認めていると見ることができよう。一方、高橋五郎『漢英対照いろは辞典』は、語釈として「おのれ、わがみ」を挙げ、対応する英語は「one's self」のみが上がっており、再帰代名詞(名詞)の「自分」のみを認めているように見える。その他、記述からは明確でない場合もあるが、再帰的な用法(名詞)のみを挙げている辞書(玉村寅吉『和英語類集』1887、高潮豊三『明治通俗和英節用集』1887など)と、一人称代名詞を別項目として挙げている辞書(上田万年・松井簡治1915-1918『大日本国語辞典』など)、代名詞の項のみあるが、両用法を認めているように見られるもの(意味記述として「おのれ、わたくし、自身」などとなるもの。林夔臣・棚橋一郎編1897『日本新辞林』、堀籠美善1917『俗語大辞典』など)いずれも認められる。

一方「自分」が取り上げられている文法書は多いとは言えないが、例などで出てくる場合、辞書と同様、「自分」を一人称代名詞とするものと、再帰代名詞のみを認めるものがある。一人称代名詞は、使用者や使用場面によって用いられる語が異なるとする文献が多いが、「自分」を一人称代名詞の例としているものでも、これに関する注記がない、あるいは一般的に用いられる語であるとするものが多い。

- (9) 人代名詞ノ尋常ナルモノハ。右ノ他ニモ古今、雅俗、尊卑、男女等二用キ分クルモノ、尚、甚ダ多シ。左ニ、其若干ヲ挙グ。
自称「麿、」やつがれ、「おのれ、」それがし、「余、」身、「自分、」拙者、「わらは、」(女ニ)(大槻文彦1897:58-59)

- (10) その他純粹の標準語的なものは、口語の固有語の自称にはない。しかし成立の問題はとにかくとして「わたくし」「わたし」「われわれ」「僕」「自分」などは今日の口語として一般的に用ひられてゐる。(木枝増一 1931:78)

これらの文献では、再帰的な用法の「自分」については言及していないが、『言海』と『広日本文典』両方の筆者である大槻文彦が、再帰的な用法の「自分」を名詞としているように、名詞と考えているものも多いのであろう。鶴田常吉(1924)は、再帰的な用法の「自分」を名詞とし、一人称代名詞の「自分」とは品詞が異なるとして、以下のように述べる。

- (11) 自称の代名詞は表出者が自身を指す代名詞で

わたくし 僕 自分

等がある。(略)「わたくし」「僕」皆名詞から転じた代名詞である。「自分」にも亦名詞と代名詞とがある。

自分の事は自分でせよ。(名詞)

自分は土佐の生れである。(代名詞) (鶴田常吉1924:34)

一方、「自分」の再帰的な用法のみ記述があるものもある。(12)のチャンブレン(1887)は、一人称の例として「自分」は挙げず、(13)の松下大三郎(1901)は一人称代名詞としての「自分」を認めていない。

- (12) 人代名詞のうちに、自己にも他人にも用ふるものあり、たとへば己^{おの}れ、我^わが、自分のごとし、これ等は外国語法に従ひて、反省代名詞と称するも可なり(チャンブレン1887:13-14)

- (13) 非話説代名詞とは、話説を標準とせず、話説ならざるものを以て標準として形式を設け其の形式によりて間接に事物を表はす所の代名詞なり。換言すれば話説代名詞ならざる代名詞なり。「自分」(略)などの如し。「自分」「他人」などは、行動を標準として行動者(行動の主体)非行動者の二形式を設け、之によりて事物をあらはす代名詞なり。(略)私、オレ(我)

などは説話者を表はすものなり。これにて自分、己などゝ私、我などとの別を知るべし。(松下大三郎1901:18)

このように、「自分」という語の扱いは研究者によって異なり、実際の使用の実態は判然としない。

なお、明治期から国語政策に大きな影響を持っていた保科孝一は、保科(1911)で、「東京の中流社会に、専ら使用されておる人代名詞」として「私」「わたくし」「ぼく」などととも、「自分モ賛成シテ見タガ、実ワアマリ面白クナイ」という例を示しつつ「自分」をあげており(保科1911:64-68)、さらに保科(1910)では、これらを「小学校において教授すべきもの」(保科1910:455)としている。

3. 明治期における一人称代名詞としての「自分」と軍隊における一人称代名詞

「自分」の語誌的な研究としては遠藤好英(1972)、遠藤好英(1975)、遠藤好英(1983)がある。それによると、明治以降における一人称代名詞としての「自分」は、1888年の矢崎嵯峨の舎(嵯峨の屋おむろ)の文章、二葉亭四迷の翻訳文を初期の例とし、その後、内田魯庵、正岡子規、石川啄木、国木田独步、田山花袋、島崎藤村、夏目漱石、芥川龍之介、白樺派の作家、太宰治等の作品にみられる。ただし、その多くは語り手が主人公の一人称小説の地の部分や、批評・評論文で、小説の会話文には一人称でも他の語が用いられる。たとえば、矢崎嵯峨の舎の「初恋」では、「回想の文章の中で、主人公は一貫して一人称代名詞として自分を用いている」が、「再帰代名詞としては、『自分』は用いられず」、「其身」や「自身」が用いられ、「自分・自分達(等)は、地の文だけに指摘される」(遠藤1975:50)。この外の作家についても同様の傾向が見られる。

では、軍人の使用する言葉として「自分」が用いられる例はないか、まず軍隊の実状を知る軍人ないし軍隊経験者が書いたものから見てみよう。

日本の軍隊は、武士階級が消滅後、1873年徴兵令が施行され、兵士が全国から召集される。この時期から日清戦争(1894-1895)までの間の軍隊生活を軍

隊経験者が、軍人の会話を入れながら描いた作品として確認できたもののうち、年代が古いものとしては、1895(明治28)年に雑誌『少年世界』に発表された「近衛新兵」をはじめとする一連の久留島武彦(「近衛新兵」をはじめ多くは筆名を尾上新兵衛とする)の作品がある⁸⁾。「近衛新兵」は、入営からその後の新兵の生活について、少年向けに書かれたものである。この作品では、「自分」が前記の文学作品の場合と同様、地の文に用いられている。

- (14) 町端^{まちはずれ}の真宗寺で、我が郡の徴兵適齢者が、検査を受けて二た月計り経過^たした後、自分^{じぶん}は当選第一番、而も近衛歩兵に編入といふ令状を受取つた。(久留島1895a:39)

この作品の地の文では、「自分」以外に「己」^{おれ}(入営直前の場面の1例)、複数を現す「吾等」「吾々」が用いられている。一方会話文では、語り手が一人称を用いる例はなく、作品の最後に、少年読者に対しての以下の文があるのみであり、そこでは「僕」が用いられている。

- (15) 若し夫れ少年諸君の中に、其实況を知らんと欲する者あらば、遠慮無くやつて來玉へ固パンでも南京豆でも、僕が驕つてあげやうわイ。(久留島1895b:409)

語り手以外の人物が会話文で用いる一人称代名詞としては、以下の語がある(軍人同士の発話のみとする。以下においても同様)

- (16) 「僕」「僕等」；兵士同士
「己」^{おれ}「乃公」^{おれ}「己達」^{おれたち}；兵士同士、教官→新兵
「私」^{わたくし}；兵士→下士官
「自分」；中隊長→新兵
「予」^{われ}「吾等」^{われら}；中隊長→新兵

(16)にあるように、下位の軍人から上位の軍人という場合、「私」が用いら

れている。

- (17) ^{わたくし}私はあの左なる森林を搜索して、異常が無ければ、此处より四五百メートル離れて居る。^{みつまたみち}三叉路に行て、本隊に合します。終り。(久留島1895c:40)

また、(16)に「自分」があるが、これは新兵に向かって中隊長が話すことば(18)の1例だけで、さきの「のらくろ」などとは異なり、上位の者から下位の者へことばであり、新兵たちへの訓示である。

- (18) (略)との御講評であった、自分も実に満足に思ふ、これひとへに教官たる軍曹上等兵の苦心と、各兵が奮励して呉た故である。(久留島1894:406)

また、同じ久留島武彦の「兵営生活」には、上位の少将から下位の衛兵司令(軍曹)に「自分」を用いる例がある。

- (19) 自分は天機伺の為に参内しやふと思つてやつて来た所に此の一喝には覚えず襟を正した(久留島1896:54)

「近衛新兵」の作者久留島武彦は、書いた時点で実際に軍人であったが、日清戦争の前後の時期、久留島の作品以外に、軍人あるいは軍隊経験者が書き、かつ話し言葉が写された作品は確認できていない。しかし、軍隊経験のない小説家が、日清戦争当時を背景とした軍隊や軍人を描いた小説はいくつかある。以下に示すのは、泉鏡花、山田美妙、川上眉山の小説の例である。

泉鏡花の「海城発電」(1896年)は、日清戦争を舞台とする小説で、(20)で始まる。

- (20) 「自分も実は白状をしようと思つたです。」
と汚れ垢着きたる制服を絡^{まと}へる一名の赤十字社の看護員は静に左右を顧み

たり。(泉1896:164)

ここで、一人称代名詞「自分」が会話文に用いられているが、これを使っているのは軍人ではなく、赤十字社の看護員である。(20) 以外でも、この看護員の用いる一人称代名詞は「自分」である。この小説には看護員の他に軍夫達が登場するが、そのことばに用いられる一人称代名詞は、「吾」と「^{おれ}おいら」、それに複数の「われわれ」で、「自分」は現れない。

同時期が舞台の山田美妙「嗚呼広丙号」(1897年)は、海軍少尉藤木が作者に話をするというスタイルで書かれている。すなわち、会話の体裁をとってはいるが、実質的には藤木が語り手の一人称小説とも言える。この小説では、藤木が一人称代名詞「自分」を使っている。

(21) 丁度この時一番分隊長永井群吉氏が本直、自分はその副直で、十二時から当直の士官と交代する所で、そこで此事実を見ると同時に、自分は航海日誌に「一時五十三分暗礁に乗り上ぐ」と記し付け、(山田1897:376)

ただし、(21)は藤木から美妙への発話であり、軍人同士の会話中のものではない。かつ、同様の文脈で「僕」も使用されている。そして、軍人同士の会話の中に一人称代名詞が用いられる場面があるが、そこでは「僕」が用いられている。

川上眉山の「大村少尉」(1896年)も日清戦争当時が背景となっている。この小説も、大村少尉が自分の弟と自分の親友の妹に語る形となっており、これも一種の一人称小説と言えるかもしれないが、この小説でも弟や親友の妹に語る部分には「自分」が多く用いられる。

(22) この病院に入ってから、彼是一月にも余るであらうが、自分も永い間、^{あなた}貴嬢の看護を受けました。(川上1896:287)

「自分」以外に、地(すなわち弟と親友の妹に向かってのことば)で用いられている一人称代名詞には、「わし」や「^わ我れ」(主に弟に向かって話す部分)、

さらにわずかであるが、名字や名前で自分を指す場合がある。

大村少尉が上記二人以外の人物へ話しかけることは、すなわち実際に会話となっている例の中では1例、一人称代名詞が用いられている。それが(23)で、ここでは「自分」ではなく「わたくし」が用いられている。話し相手は身分が上の中将である。

(23) はい、わたくしが大村楠雄で、以来何分閣下にもお見知り置きを願ひます。(川上1896:333)

日清戦争から10年後に、日露戦争(1904-1905)が始まるが、この戦争については多くの戦記や手記が残されている。その中で最も広く読まれたのは、櫻井忠温¹⁰⁾が自身の体験をもとにした戦記文学『肉弾』(1906年)と、水野広徳¹¹⁾の戦記『此一戦』(1911年)であろう。櫻井が陸軍、水野が海軍の軍人である。『肉弾』には、一人称代名詞としての「自分」はない。主人公である櫻井中尉自身のことばとして現れる一人称代名詞は(24)の通りである。

(24) 「おれ」；櫻井中尉→従卒 櫻井中尉→戦友
「私」^{わたくし}；櫻井中尉→先輩の大尉
「予」；櫻井中尉→部下の小隊に対する訓示

櫻井以外の人物も、下位の軍人が上位の軍人に向かって話す場合の一人称代名詞としては、「私」^{わたくし}を用いている。

(25) 私^{わたくし}の棺桶です。＜櫻井中尉→先輩の大尉＞(櫻井1906:61)

(26) 中尉殿、私^{わたくし}の傷はたいした事でも無いやうですから、未だ後へは退りませぬ。＜兵卒→櫻井中尉＞(櫻井1906:76)

『肉弾』で一人称代名詞「自分」が現れるのは、ロシア人捕虜が櫻井中尉に向かって発したとされる(27)のみであり、日本の軍人の言葉としてはあらわれない。

(27) 知つてゐる。先達は自分の戦友も捕虜になつて、日本へ往つた。(櫻井 1906:36)

『此一戦』は『肉弾』とは異なり、会話文は少なく、かつその会話はほぼ士官同士の会話である。そのため、出てくる一人称代名詞の種類は少なく、現れる代名詞は「俺」か「僕」であり、「自分」は用いられていない¹²⁾。

このように、明治期に書かれた小説や戦記物に、主に地の文の中の一人称代名詞としての「自分」は見られるが、話し言葉の中でかつ身分が下の兵士が上官に対し「自分」を用いた例は確認できない。この他に確認できた、焦残生『兵士の百態』(1902年)、安川隆治『血烟 日露実戦記』(1911年)¹³⁾にも、一人称代名詞「自分」はない。また某中尉『戦争の片影』(1911年)、大月隆仗『兵車行 兵卒の見た日露戦争』(1912年)、茂沢祐作『ある歩兵の日露戦争従軍日記』(2005年)¹⁴⁾は、上記の小説と同様、地の文に「自分」は用いられるが、会話文には一人称代名詞「自分」は現れない。

ただし、昭和になってから刊行された日清・日露戦争当時を回顧したものの中には、下位の兵士が上官に向かって用いる「自分」がみられる。まず、日露戦争で戦死し後に軍神といわれるようになった橋中佐の部下で軍曹であった内田清一が日露戦争当時を回顧した手記『あゝ彼の赤い夕陽』(1928年)では、以下のような例が見られる。

(28) それでは内田軍曹殿、自分はこれから戦線の方へ突進しますから、どうぞお大事に……。<加藤上等兵→内田軍曹> (内田1928:428)

(29) 不合格の宣告を受けました。し、しかし、自分は、どうあつても出征します。<内田軍曹→安藤副官> (内田1928:85)

(30) は、非軍人に対し「自分」が用いられた例であるが、これは相手が上官橋中佐の未亡人であるためであろう。また、この部分では「自分」とともに「私」も用いられる。

- (30) 何と申上げてよいやら、自分にもわかりません。重傷の隊長殿を終日私の腕に擁しながら、生きて救ふことも出来ませず、自分ひとりが生残りしましたこと、責任上面目ない感じがしてなりません。＜内田軍曹→橋未亡人＞ (内田1928:448)

しかし、下位の軍人から上位の軍人への一人称代名詞として、数量的には、「自分」よりも「私」の方が多い。

- (31) 副官殿、後は確かに私が引受けました。内田軍曹の生命のあらん限りは必ず隊長殿を擁護しますから、貴官は戦線の方の指揮を何分願ひます。＜内田軍曹→副官＞ (内田1928:251)

なお、(32) は上位の軍人から下位の軍人への言葉であるが、ここにも「自分」が用いられている。

- (32) (略) 隊長も、副官も、自分も悉く負傷してしまつた今日となつては、最初から本部に在つて事情に通じて居るのは貴様ばかりだ。(略) ＜内田軍曹→大塚上等兵＞ (p.441)

また、(30) の「内田軍曹」のように、下位の軍人から上位の軍人に向かっている場合、人称代名詞ではなく、名字あるいは名字に階級(役職)を後接した形で自分をさす場合もある。

この他に、石光真清の手記をまとめた『城下の人』(1958年)¹⁵⁾、『望郷の歌』(1958年)には、一人称代名詞「自分」がいずれも石光の従卒から石光へのことばとして出てくる。(32) は日清戦争、(33) は日露戦争の部分で、従卒は異なる人物である。ただし、両書とも(および、同じく石光の手記をまとめた『曠野の花』、『誰のために』も含め)、一人称代名詞「自分」が用いられているのはこの部分のみである。

- (33) 中尉殿、大丈夫であります。井手口がついております。自分が必ず癒し

てさし上げます。(石光1958a:291)

- (34) 司令官殿、自分には学問がありませんが、先ほどから色々のことを考えました。(石光1958b:54)

これらの例が、明治期の状況をそのまま反映したものか、それとも軍隊用語としては「自分」を用いるという執筆当時すなわち大正ないし昭和期の一般的な言語感覚によるものか、判断することは出来ない。いずれにせよ、少なくとも明治期に書かれた文献において、一人称代名詞としての「自分」は地の文においては広く認められるが、実際の話し言葉の中では、頻繁に現れるものではなく、かつ下位の軍人から上位の軍人へという方向も主とは言えない状況で、逆に上位の軍人から下位の軍人への言葉の中でも用いられる。「自分」は、江戸末期において将軍も用いていたのであるから、上位の者が下位の者への言葉として用いられるのも当然と言えようか。また、仮に下位の軍人から上位の軍人へも用いられたとしても、それは「自分」という語そのものが待遇的な意味を持つのではないと考えることができよう。

4. 大正・昭和初期における一人称代名詞としての「自分」と軍隊における一人称代名詞

大正期の軍隊を舞台とし、話し言葉を書き写した資料として確認できたものは、まだ多くはないが、その中に、実際の軍人の日記、塚本正一郎「陣中日記」がある。公にされているのは、いわゆる尼港事件(1920年)の前年1919年の7月から10月分で、当時筆者の塚本中尉はニコライエフスク(尼市)の近くにあった。日記という性格上、会話文は少ないが、大隊長の所へ塚本中尉が抗議に行くという所を中心として、若干の会話、話し言葉が書き記されている(地の文の一人称代名詞は「僕」ないし「私」¹⁶⁾)。その会話文で用いられている一人称代名詞には、「自分」「私」「僕」があり、「私」は下である中尉から上の大隊長のみ、「自分」と「僕」は上位の大隊長から下位の中尉へのことばに多いが、「自分」は中尉から大隊長へのことばにも現れる。

- (35) 然るに、飽くまで表沙汰にするといふ貴方の決心を伺ひましては、最早

私の採る道は、唯一つであります。〈塚本中尉→石川大隊長〉(塚本1919:259)

(36) 茲に大隊長の命に抗しと書いてあるが、中尉は何時自分の命に抗したか。自分は君に何も命令はしやしない〈石川大隊長→塚本中尉〉(塚本1919:259)

(37) 貴方が夫れをお取継ぎ下さらなければよろしいです。自分は直接上司に差上げませう」と云って、机の上の願書をポケットに蔵った。〈塚本中尉→石川大隊長〉(塚本1919:259)

(38) 君等は僕の意図をよく解らんから僕の処置を悪意に解したであろう。この石川はそういふ男ではないよ……〈石川大隊長→塚本中尉〉(塚本1919:259)

明治末から大正時代にかけては、たまむし生『若旦那の兵隊さん』(1916年)、奥野他見男『大学出の兵隊さん であります物語』(1917年)等の軍隊を舞台としたユーモア小説が現れる。

『若旦那の兵隊さん』では、一人称代名詞「自分」は、上位の軍人から下位の軍人へのことばにしか出てこない。下位の軍人から上位の軍人へは「私^{わたし}」と名字が使われている。

(39) 自分は少尉殿の命令で為たのだが、少尉殿が自分を呼ぶ前「誰か来い」と云はれたのが、お前達には聞えなかつたか?〈古兵→初年兵〉(たまむし生1916:311)

(40) 私^{わたし}だつて、貴郎^{あなた}だつて異^{ちが}やしませんよ〈初年兵玉村→上等兵〉(たまむし生1916:39)

(41) はい。玉村^{じやうだん}が戯談半分にしたのが悪うありました、今後気を付けます。〈初年兵玉村→少尉〉(たまむし生1916:118)

『であります物語』では、下位の軍人から上位の軍人へは「私^{わたくし}」、「自分」、名字が用いられている。ただし、名字がやや多くあらわれるが、いずれも出現回数が少ない。

- (42) 少、少、少尉殿、^{わたくし}私が、わ、わるうございました (奥野1917:287)
- (43) 教官殿、自分^{ママ}が未だ竹刀を持つた事ありませんから止めさして戴きたうございます (奥野1917:73)
- (44) 見習士官殿、石塚が洗うであります。石塚に渡して下さい (奥野1917:130)

昭和に入ってから、小説や戦記など文献が多くなるが、ここでは、映画のシナリオを取り上げる。1938年制作の「五人の斥候兵」(脚本荒巻芳郎、監督田坂具隆、原作高重屋四郎、日活多摩川作品)では、以下のような一人称代名詞が見られる¹⁷⁾。

- (45) 「自分・自分達」；兵卒→士官・下士官、下士官→士官、士官→部下達<訓示>、士官→兵卒、伝令→士官
「俺」；兵卒同士、士官・下士官→兵卒、士官→下士官
「私」；下士官→士官
「我々」；士官→部下達<訓示>
「わし」；士官→兵卒
「名字」；兵卒→士官・下士官<報告>、下士官→士官<復唱>、士官→部下達<訓示>
「名字階級」；兵卒→士官・下士官<復唱>

(45) のように、下位の軍人が上位の軍人に言う場合には、「自分」が多く用いられている (10例中6例) が、上位の軍人から下位の軍人へのことばにおいても「自分」が用いられることがある。その多くは訓示など改まった場面である。それぞれの例を下に挙げる。

- (46) 隊長殿のは破れておりましたんで自分のを持ってまいりました<兵→部隊長> (荒巻1938:14)
- (47) だがただいまよりお前達の命をこの岡田に授けて貰いたい。——そして

自分と一緒に死んで貰いたい<部隊長→部下> (荒巻1938:19)

また、(46)にもあるように、名字あるいはそれに階級をつけた形も用いられるが、これは、下位の者が上位の者に対し用いる場合は命令の復唱や上官への報告、上官の場合は(46)のような訓示の場合に多い。なお、1940年製作「西住戦車長伝」(脚本野田高梧、監督吉村公三郎、原作菊池寛、松竹大船作品)では、下位の者から上位の者への場合、自分をさすことばとしては「自分」よりも、名字を言う場合が多い。

(48) なぜアンちゃんは早うえらい兵隊になっとかんじゃったんかと云うて荒川を責めました。そして荒川がなんと云うて聞かせても嘘じゃと云うて、しまい泣いてしまいよったんであります<荒川二等兵→西住中尉> (野田1940:61:)

「五人の斥候兵」・「西住戦車長伝」が陸軍の軍人を描いているのに対し、1942年制作の「ハワイ・マレー沖海戦」(脚本山本嘉次郎・山崎兼太、監督山本嘉次郎、東宝砧作品)は、海軍の舞台としている。このシナリオで、「自分」は(48)の台詞でしか現れない。これは、「海軍の精神とはなんぞや。軍人としていかなる信念をもつべきや、ただひたすらに祈りつづけた」結果として覚ったことを話す場面である。なお、最初にあらわれる「自分」以外、再帰的な用法とも考えられる。

(49) 一年、二年、祈りつづけた。第三学年のある時、自分は潤然と感ずるところがあった。自分は自分ではない。自分は無だ。自分の悉くは畏くも大元帥陛下に捧げ奉ったものである。——と、腹の底からはっきりと覚ったのだ。これが自分の腹を作る土台になった。<立花中尉→友田准士官> (山本・山崎1942:92)

この他の場面での一人称代名詞は、同輩同士ないし上位の者から下位の者へは、「わし・俺・僕」、下位の者から上位の者へは「私」ないし名字に階級をつけた形が用いられている。これは、衣畑・楊(2007)が引用する阿川弘之のこ

とばと符合する。

- (50) いや、海軍では「自分」と言わなかった。「私」です。「わたし」じゃなくて上官に対して「わたくしは」と言う。同期生には「俺」ですけど。(阿川弘之・井上ひさし・小森陽一2003:225)

また、以下のように、海軍では「自分」は上位から下位への言葉として用いられるとしたものもある。

- (51) 士官の用うる自称として、公式には「本職」「小官」であるが、通常は上級者に対し「わたくし」、下級者には「おれ」「自分」というようにはっきり区別されていた。対称には上級者には職名、下級者には一般に「お前」であるが、下士官に対しては「〇〇兵曹」といい、兵は呼びすてである。同級者間では「貴様とおれとは同期の桜」の歌で代表されるようにもっぱら「おれ」「きさま」であった。(額田淑1960:59)

ただし、丹羽文雄が報道班員として第一次ソロモン海戦時に戦艦鳥海に乗り込んだ際の状況を書き記した「海戦」(1942年)には、次のような「自分」の例がある。

- (52) 「しかし、自分には左手がのこつています。長官のお給仕は、左手で立派にやれると思います」<従兵篠崎→副官> (丹羽1942:392)
- (53) 「うん、やつてくれ、自分もそう思っていたんだ」<副官→従卒篠崎> (丹羽1942:392)
- (54) 「自分らのしたことが、陛下のお耳に達したのだと思うと、うれしいのです。」<士官→報道班員> (丹羽1942:396)

(52) は下位の軍人から上位の軍人へのことばである¹⁸⁾。それに対し、(53) は(52)と同じ二人の会話であるが、(52)とは逆に上位から下位へのことばである。さらに(54)は軍人以外の人間(本文中の「私」)へのことばである。

なお、時代はさかのぼるが、大正時代に海軍を部隊に書かれたユーモア小説大窪弥次六(1918)『兄哥の水兵さん』¹⁹⁾にも、再帰的用法の「自分」は見られるが、一人称代名詞としての「自分」は出て来ない。なお、同書では陸軍と海軍の言葉の違いについて触れている。

(55) 海の水兵さん、陸の兵隊さんといへば、同じ国家の干城ではあるが、水兵さんには水兵さんの言葉遣いがあり、兵隊さんには兵隊さんの言葉遣いがあるから変なものだ。といふほど改つて首を傾げることほど左様に複雑な問題でもないが、兵隊さんの方で『ハイ。何々であります。』といふところを、水兵さんは『ハイ。何々です。』三字儉約してゐる。(大窪1918:100)

以上見てきたように、昭和に入ると、特に陸軍において「自分」の用法は、下位の軍人から上位の軍人への用法が主となる。また、訓示や改まった場面においては上位の軍人から下位の軍人へ「自分」が用いられる場合があるが、これは、明治期にもみられた用法である。大正期の資料に現れる「自分」は、明治時代と同様、一人称代名詞として用いられても、必ずしも下位の者から上位の者へのことばではない。しかし、柳家金語楼が入営したのが1921(大正10)年、除隊がその翌年であり、その経験を早速落語とし、またのらくろの作者田河水泡が除隊したのも1922年であることから、大正の遅くとも後半には、すでに(陸軍の)兵隊用語として定着していたともみられる。

5. 現代における一人称代名詞「自分」

0. で述べたように、現代でも一人称代名詞として「自分」が用いられることはあり、多くの国語辞典で、「自分」の項に一人称代名詞としての意味もあげられている。

『明鏡国語辞典』

「①[名]その人自身。自己。おのれ。②[代]〔一人称の人代名詞〕わたくし。▽軍隊用語としても用いられた。」(例文省略)

『三省堂現代新国語辞典』

「①[名]その人自身。②[代]話し手が、その人自身をさして呼ぶことば。

【用法】多く、男性が使う。」(例文・類義語省略)

しかし、現代この一人称代名詞としての「自分」の使用者は、特定の背景のある人と捉えられることが多いように思われる。すなわち、いわゆる体育会系の人達およびその出身者などである。衣畑・楊(2007)には男性のプロレスラーの使用例があがっているが、男性に限らず女性でも体育会系の人々に使われている。たとえば、桐野夏生(1995)『ファイアボール・ブルース』は女子プロレスの世界を舞台とした小説であるが、語り手で、スター選手「火渡抄子」の付き人をしている「近田」は一人称代名詞として「自分」を用いる。この点について、作者の桐野は「文庫本のためのあとがき」で以下のように述べている。

(56) 「近田」は自分のことを「自分」と呼ぶ。「あたし」でもなく、「私」でもなく、「俺」でもない。私が「近田」に「自分」と呼ばせたのは、取材で会った女子レスラーたちが例外なく「自分」と称していたからだった。「自分」という人称代名詞は軍隊用語だ。階級社会のなかにいる人間の発する言葉である。また、中性性をも獲得している。だから、女子プロレス界のような唯格主義の階級社会にあり、また女性でありながら女性性を廃した肉体言語によって成り立つ格闘技世界にあって、必要な人称代名詞と言えよう。従って、「近田」は慣習に忠実に「自分」と称するのであり、そこに「近田」の自己主張のなさが表れている。だが、「火渡抄子」は「あたし」と称する。なぜなら、彼女は特別な存在だからだ。女性性や階級制などから解放された人間、自由な人間だからである。そんなことを最初から超越した人間だからである。(桐野1998:294-295)

このように一人称代名詞「自分」は、東京語でも女性をも含め特定の集団では用いられる。これは、「自分」が階級社会である軍隊で下位の軍人が上位の軍人に向かって用いる語として定着し、それが戦後も階級社会の存在するところで用いられ続けたということであろう。

ところで、軍隊で用いられる表現の中には、「であります」が山口方言であ

る(柴田武1962他)など、特定の方言から入ったものがあるとされる。では、一人称代名詞として「自分」も特定の方言の影響と考えられるのか、現在の方言状況について確認してみる。まず、全国同じ調査票を用いて調査した結果をまとめた平山輝男他編(1992-1994)では、滋賀の「ぼく【僕】」の項で「親しい相手に対してやや改まった場面で男性が使う。相手は同等以下」という記述があり、新潟では「わたし【私】」の項目にある²⁰⁾。また、国立国語研究所(1989-2006)には、「これは私のです」の「私」を表す語形の地図が3枚(「この土地の目上の人にむかって、ひじょうにていねいに言うとき」「この土地の知り合いにむかって、ややていねいに言うとき」「親しい友達にむかって言うとき」の3場面)ある。この3枚の地図すべてに「ジブン」が見られる。まず、「ひじょうにていねいに言うとき」の地図では、北海道から熊本県まで、南関東と中国四国に若干のまとまりはあるが、全国17地点に点在している。それに対し、「ややていねいに言うとき」の地図では、北海道から福岡県まで点在しているが、地点数は7地点に減る。さらに「親しい友達にむかって言うとき」の地図では、愛知県名古屋市と愛媛県松山市の2地点のみになる²¹⁾。そして、平山他編(1992-1994)で記述のあった、新潟県にはどの地図にもジブンはなく、滋賀県には、「ひじょうにていねいに言うとき」の地図に1地点あるが、これは平山他編(1992-1994)の記述とは異なる。これらの結果をみると、ジブンは、特定の地域の方言形としては安定していない可能性が考えられる。また、ジブンが「ひじょうにていねいに言うとき」に多く見られ、丁寧度が下がると用いられなくなるのは、ジブンが回答されたこと自体も含め、国立国語研究所(1989-2006)の調査の話者が「1925年(大正末年)以前に生れた男性。ただし、1925年は認め得る最下限を示したものであり、原則として調査時において60歳~75歳の範囲であることが望ましい(1925年生れの話者は、調査発足の年に54歳である)」(第1巻解説、p.20)とされていること、すなわち、軍隊生活を送った可能性のある話者が多いこととの関連が考えられそうである²²⁾。これらの状況から見て、軍隊で用いられた「自分」が特定の方言から流入したものではないと考えられる。

6. まとめ

以上見てきたところでは、以下のような傾向を認めることが出来よう。まず、江戸時代には、どの程度一般的に用いられていたのかは不明であるが、武士の言葉として用いられていた一人称代名詞「自分」は、明治期になると書き言葉として用いられることが多く、話し言葉として用いられる場合には、下位の者から上位の者へという方向性は確立していない、それが大正期以降、陸軍において下位の軍人から上位の軍人へも用いられるようになる。すなわち、軍隊では訓示などの場合上位の軍人から下位の軍人へも用いられ、また下位の軍人から上位の軍人へも用いられることがあるということになる。では、なぜ、「自分」は上位の者からも下位の者からも用いられる語であったのだろうか。中村(1982)は、「自分」について以下のように述べている。

- (57) 旧日本軍隊では「わたし」や「ぼく」の代りに「自分」という代名詞が使われたが、それは、「ぼく」や「わたし」に含まれている特殊な“匂い”を嫌ったためであろう。「自分」のほうが「おれ」や「ぼく」は無論のこと、「わたし」よりもなおニュートラルなのであり、その点では英語の I にいっそう近いのだ。(中村1982:31)

おそらく、再帰的用法と代名詞の区別が困難な場合のある「自分」にはもともと、「ぼく」「おれ」「わたし」のように、話し手と話し相手の関係による制約がなかった、すなわち中立的な語だったのであろう。そこで、特定の話し相手の想定されない書き言葉において、一人称代名詞として用いられた。さらに、話し言葉としては、親密性や改まりなどを示すことがないので、上位の者から下位の者からも、下位の者から上位の者へも用いられるようになった。これも、「自分」の中立性によるのであろう。文末などの待遇表現によって、上位からの言葉であるか下位からの言葉であるかが明示され、「自分」自体は中立的に、一人称であることを示すことができるからである。この中立性は、名字で自分をさす用法とも共通すると考えられる。毛利八十太郎『洋行帰りの兵隊さん』(1922年)には、次のような一節がある。

(58) 軍隊の禁物は『私(わた)し』と云ふ一人称である『雨梧楼²³⁾は何々したのであります』と三人称でなければ通用しない、自分を第三者に措いて物を言ふのは最初の間は頗る間の抜けた感がするもので落語家の話ではないが俺れは誰れだおだいと聞いても見たくなる、併し確かに軍隊では此方が万事に便利である。(毛利1922:36)

これまで見てきたように、実際には「わたし」も使われる場合があるが、(58)のことばは、話し手自身をさす表現として名字を使うことを、上で言う中立性という見方と同様に捉えていると考えて良いのではなかろうか。

また、陸軍において「自分」が一人称代名詞として用いられるようになったのは、陸軍における漢語使用の多さも関係するのかもしれない。

(59) 「兵語」には、訛言(なまり)による誤解を避けるため漢音読みを多用するという特徴があるが、陸海軍間では若干の違いがあった。具体的にみると、漢字漢語万能主義の陸軍に対し、海軍では、英語が多く用いられるとともに、「よーそろー」(宜う候)に代表される「やまとことば」がかなり取り入れられている(額田淑「海軍の言語生活」、『言語生活』一九六〇年十一月号)。(吉田裕2002:30)

いずれにせよ、江戸期には将軍も用いていた「自分」が、現在では一人称代名詞としては主として階級社会において下位の者から上位の者に対していう場合に用いられるようになるという転換が生じたわけである。そこには「自分」の中立性を媒介として、文末などの待遇表現によって上位下位いずれでも用いられるようになったという中間段階の存在が考えられる。

では、「自分」が下位の者からも用いられるようになった契機は何であろうか。明治期から昭和期まで、入営する人や新兵を教育する人たちのために、一ノ瀬俊也(2004)のいう「軍隊マニュアル」が多く出版される(ただし、その内容は重複する部分が多い)。その中には、言葉遣いも取り上げられていて、上官などに向かって言う場合、どのように呼ぶかについての記述はある。しか

し、自分をどのように言うかについての記述は現在のところ見つからない。従って、いつ頃から軍隊用語として定着したのかを言うことはできないが、おおよそ、これまで見てきたように、大正期と言えよう。では、なぜこの頃このような傾向が生まれたのだろうか。その原因として日露戦争後の軍隊の変化を挙げることはできるのではなかろうか。日露戦争時における軍隊は、組織としては必ずしも完成されたものではなかった。荒木肇 (2010) では以下のように述べる。

- (60) 昭和になって、日露戦争中に若い将校だった將軍たちは語った。当時は、何でもかんでもなっていなかった。今から見れば、すべてが失敗ばかりだったという苦い回顧も、こうしたこと(命令の意味合いなど:引用者)を説かなければならぬくらいの実態があったからである。(略) もっとも近代的な組織だった陸軍がこの通りである。戦時には分隊長になる下士たちに、平時から統率・管理の経験を積ませる必要があると思い知ったのが日露戦争の実態だった。(荒木2010:203)

その反省から、日露戦争後、田中義一を中心として軍隊の刷新がなされる。「戦後の人たちが陸軍の兵営生活というと思い出すイメージは、たいていが田中義一以後の陸軍の姿だといっている」(荒木2010:189)。「自分」が陸軍において一人称代名詞として定着していくのが日露戦争後、大正期はじめ頃までであるとするなら、この時期に合致すると考えて良いのかもしれない。すなわち、軍隊が整備される段階で、軍人間の関係いいかえれば階級制度の再確認が行われ、その動きと一致する形で人間関係が反映される相手と呼ぶ言葉が定まっていたのではなかろうか。その際、一人称としては人間関係のあらわれの点で中立的な「自分」が定着していったと考えるわけである。ただし、これを裏付ける資料はまだ確認できていない。

本稿では、明治時代から軍隊を背景とする様々な文献に見られる「自分」および、一人称代名詞についての概観を行った。しかし、まだ確認できた文献は少なく、種類も統一性に欠ける。また、他の一人称代名詞との関係、場面毎の詳細な観察など問題は多く残っており、今後さらに探求を進める必要がある。

なお、本研究は平成20～23年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 課題番号20320073、および平成21～23年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 課題番号21520478によるものである。

注

- 1) 柳家金語楼は、1921年軍隊に入営、1922年に除隊。
- 2) 引用において、漢字は新字体に変えた。また、ルビについては適宜残してある。以下同様。
- 3) ページは、使用文献に示した引用書 (引用文献参照) のページ。以下同様。
- 4) 田河水泡は、1919年入営、1922年に除隊。
- 5) 連載されたものと単行本では最初の部分が異なるが、連載されたものでも単行本と同様、入営後直ぐに「自分」を用いている。
- 6) 掲載開始時の題名は「のらくろ二等卒」。その後階級名の改称により、単行本では「のらくろ二等兵」。
- 7) 後の「しうちやく」は本文ではくの字点。本稿ではくの字点は開く。以下同様。
- 8) 掲載当時、久留島武彦は近衛第一聯隊に入営し遼東半島から台湾に派遣されていた。
- 9) 本書では、「己」は兵士同士、「乃公」は教官のことばでの表記。
- 10) 刊行時陸軍歩兵中尉。のち、陸軍少将で退役。
- 11) 刊行時海軍少佐。のち、海軍大佐で退役。
- 12) 以下に示すように、『此一戦』が海軍の記録であるという点に関係している可能性もある。
- 13) 焦残生については不明。安川隆治は刊行時陸軍歩兵中尉。
- 14) 大月隆仗、茂沢祐作ともに、日露戦争に従軍。
- 15) 『城下の人』は、最初1943年に刊行されているが、それには (25) を含む部分が入っていない。
- 16) 「私」の読み方は不明。
- 17) 実際に撮影された映画の中の科白とは異なる点が多い。
- 18) この作品中、下から上へのことばはこの場面のみで、この発話の前に同じ従卒のことばとしてもう一度「自分」が現れる。
- 19) 著者大窪弥次六の軍隊経験は不明である。本書については、「S大尉どのへ」という章で、

自分は門外漢であるが、水兵であった知り合いの口から聞いた物語を書き綴ったとしている。

- 20) 大橋編著 (2003) では、新潟県の上越・中越・下越においてジブンが「お前。君」、ジブンタが「お前たち。君たち」の意味、すなわち、二人称代名詞としてあがっている。一人称と二人称のどちらが主として用いられているのかは不明であるが、人称代名詞としての存在は認められよう。
- 21) 松山市は「ややていねいに言うとき」と「親しい友達に言うとき」、名古屋市は「親しい友達に言うとき」のみ。なお、これらのデータは国立国語研究所による方言文法全国地図データを利用した。
- 22) 大阪市を中心とする地域で、ジブンが二人称代名詞として用いられる (枚浦1993等) が、『方言文法全国地図』の「あなたの傘」という項目の「あなた」を意味する語の地図には現れない。
- 23) 作品内での筆者の名前。

引用文献

柳家金語楼 (1928) 「兵隊」『漫談叢書 第五編 あぢやらもくれん』聚英閣、田河水泡 (1932) 『のらくろ上等兵』大日本雄辯會講談社、田河水泡 (1933) 『のらくろ伍長』大日本雄辯會講談社、田河水泡 (1939) 『のらくろ探検隊』大日本雄辯會講談社 (以上「のらくろ」の引用はすべて1966年講談社刊行の復刻本による)、近松門左衛門 (1724) 「関八州繫馬」(引用は1995年『新日本古典文学大系』92岩波書店)、井原西鶴 (1693) 「浮世栄花一代男 卷二鳥の声も常に替り物」(引用は1953年『定本西鶴全集』14中央公論社)、東京帝国大学史談会編 (1891-1892) 「旧事諮問録」(引用は2007年『旧事諮問録』青蛙房)、大槻文彦 (1889-1891) 『言海』大槻文彦、山田美妙 (1893) 『日本大辞書』日本大辞書発行所、高橋五郎 (1888) 『漢英対照いろは辞典』長尾景弼、大槻文彦 (1897) 『広日本文典』大槻文彦、木枝増一 (1931) 『高等口語法講義』目黒書店、鶴田常吉 (1924) 『尋常小学国語読本を資材とした日本口語法』南郊社、ビー・エッチ・チャンブレン1887『日本小文典』文部省編輯局、松下大三郎 (1901) 『日本俗語文典』誠之堂、保科孝一1910『国語学精義』同文館、保科孝一1911『日本語口語法』同文館、久留島武彦 (1895a) 「近衛新兵 第一当選」『少年世界』1-13、久留島武彦 (1895b) 「近衛新兵 第十酒保」『少年世界』1-19、久留島武彦 (1895c) 「近衛新兵 第七演習」『少年世界』1-16、久留島武彦 (1896) 「兵營生活 銷落し 歩哨 (上)」『少年世界』2-18、泉鏡花

(1873)「海城発電」(引用は1991年『外科室・海城発電』岩波文庫)、山田美妙(1897)「嗚呼広丙号」(引用は1910年『美妙集』春陽堂)、川上眉山(1896)「大村少尉」(引用は1909年『眉山全集第5巻』春陽堂)、桜井忠温(1906)『肉弾』(引用は、1969『明治文学全集97』筑摩書房)、水野広徳(1911)『此一戦』(引用は1969年『明治文学全集97』筑摩書房)、内田清一(1928)『あゝ彼の赤い夕陽』内田後援会、石光真清1958a『城下の人』(引用は1978年『城下の人』中公文庫)、石光真清1958b『望郷の歌』(引用は1978年『望郷の歌』中公文庫1979)、塚本正一郎(1919)「陣中日記」『近代民衆の記録8兵士』新人物往来社、たまむし生(1916年)『若旦那の兵隊さん』松陽堂書店、奥野他見男(1917年)『であります物語 大学出の兵隊さん』東文堂、荒巻芳郎(1938)「五人の斥候兵」(引用は1958年『キネマ旬報別冊 日本映画代表シナリオ全集4』キネマ旬報社)、野田高梧(1940)「西住戦車長伝」(引用は1958年『キネマ旬報別冊 日本映画代表シナリオ全集4』キネマ旬報社)、山本嘉次郎・山崎兼太(1942)「ハワイ・マレー沖海戦」(引用は1958年『キネマ旬報別冊 日本映画代表シナリオ全集4』キネマ旬報社)、阿川弘之・井上ひさし・小森陽一(2003)「志賀直哉—「小説の神様」の実像—」『座談会昭和文学史1』集英社、丹羽文雄(1942)「海戦」(引用は1972年『戦争文学全集2』毎日新聞社)、大窪弥次六(1918)『兄哥の水兵さん』松陽堂書店、桐野夏生(1995)『ファイアボール・ブルース』集英社(引用は、1998年文春文庫版)、毛利八十太郎(1922)『洋行帰りの兵隊さん』駸々堂書店

辞典・言語地図類

市川孝・見坊豪紀・遠藤織江・進藤咲子・西尾寅弥編(2007)『三省堂現代新国語辞典第三版』三省堂、大橋勝男編著(2003)『新潟県方言辞典』おうふう、北原保雄編(2002)『明鏡国語辞典』大修館書店、国立国語研究所(1989-2006)『方言文法全国地図』1-6大蔵省印刷局・財務省印刷局・国立印刷局、日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編(200-2001)『日本国語大辞典第二版』小学館、平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編(1992-1994)『現代日本語方言大辞典』明治書院

参考文献

荒木肇2010『日本人はどのようにして軍隊をつくったのか—安全保障と技術の近代史—』出窓社
一ノ瀬俊也(2004)『明治・大正・昭和軍隊マニュアル 人はなぜ戦場へ行ったか』光文社

一人称代名詞としての「自分」

- 遠藤好英 (1972) 「白樺派の文章史的考察 (上) —自分小説の創始をめぐって—」『文芸研究』
70、48-58、日本文芸研究会
- 遠藤好英 (1975) 「自分小説の系譜とその文体—二葉亭以後、明治40年まで—4」、『文芸研究』
80、49-59、日本文芸研究会
- 遠藤好英 (1983) 「自分」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙10 語誌2』、185-192、明治書院
- 衣畑智秀・楊昌洙 (2007) 「役割語としての『軍隊語』の成立」金水敏編『役割語研究の地平』、
179-192、くろしお出版
- 小松寿雄 (1985) 『江戸時代の国語 江戸語—その形成と階層』東京堂出版
- 柴田武 (1962) 「お国ことばに罪はない」『済寧』14(4)、20-24
- 杵浦勝 (1993) 「自分」『日本語学』12(7)、34-38、明治書院
- 高橋美奈子 (2009) 「地域語からみた自称詞における性差再考」『ことば』30、82-95
- 中村保男 (1982) 「I と私と自分」『翻訳の世界』7(12)、27-31、バベル・プレス
- 村崎恭子 (1975) 「『自分』という語について」『日本語学校論集』2、72-84、東京外国語大学
外国語学部附属日本語学校
- 矢野貫一 (1992-2005) 『近代戦争文学事典 第1輯～第9輯』和泉書院
- 吉田裕 (2002) 『日本の軍隊—兵士たちの近代史—』岩波書店